

届け 世界の果てまでも

令和3年 3月 9日

No. 70

文責 校長 飯久保一男

ラグビーから学ぶ



日本代表キャプテンのリーチ・マイケル選手がワールドカップ終了にあたって *Arigatou for all the support* (サポートをありがとう) と添えて自身のツイッターに掲載した写真です。

本校ホームページ【学校のひろば】→【日々のようす】→【2月】→2月18日&【3月】→3月5日をご覧ください。

4年生が「ラグビー」の指導をしていただき、その後、体育の時間に取り組んでいます。

ラグビーといえば「ラグビーワールドカップ日本大会」の印象が強く残っています。日本代表の試合も含め、いくつかの試合をテレビで興奮しながら見ました。また、日本各地の「おもてなし」に対し、各国の選手などからの感謝が伝えられ、日本のよさが認められてうれしくなりました。

さて、今号は、他のチームスポーツにはない、ラグビー独特の特徴ある精神などを紹介させていただきます。子どもたちにとっても、私たち教職員にとっても、クラスや、仲間、集団づくり関わる大切なことがラグビーから学べます。

その1 フェアプレイの精神

常に正々堂々、ベストを尽くし、勝っておごらず、負けて清く。審判は一人しかいないのだから、ごまかして反則することもできるが、絶対にそれをしない。ラグビーでは審判が一番偉いとされ、文句を言うことなどは許されていない。ラグビーは勝つことよりも、いかに立派に戦ったかを評価する。

教職員がいるときといないときで、態度を変える人いい感じはもてません。誰が見ていようがいまいが、常に、変わらず正々堂々とありたいものです。そういう人を育てたいと思います。

その2 No Side (ノーサイド) の精神

ラグビーでは試合終了の合図を「ノーサイド」と呼ぶ。ノーサイドとは、激しく戦った両方のプレーヤーが、どちらの側(サイド)も無く(ノー)なり、全員一つの友情で結ばれ、フェアプレイをたたえ、健闘を祝し合う仲間であるという意味。アフターマッチファンクションという、試合後に両チーム選手・スタッフ・レフリー・協会関係者が一同に集い、軽食や飲物をとりながら交流を深めるイベントもある。そこでは敵・味方なく、お互いの健闘をたたえ合う。

授業中に友達どうしでお互いの考えが対立して討論になったときでも、授業が終われば、仲のいいもとの友達に戻るという関係があると、安心して授業中も言い合うことができます。

その3 One for All, All for One (1人はみんなのために、みんなは1人のために) 自己犠牲の精神

ラグビーの基本精神。個人はチーム全体のために自己を犠牲にし、チームは一人丸となって個人をサポートする。

仲間の困りごとをみんなで心配して解決していく集団に育てたいと思います。また、自分一人ががんばっていると考えるのではなく、いろいろな人々の支えがあって、今の自分があることも感じてほしいと思います。

その4 キャプテンシー

ゲームが始まってしまえば、キャプテンを中心に選手達自らが責任をもってプレーする。試合中、監督（ヘッドコーチ）は、ベンチはおろか、グラウンドわきにいることもできず、観客席から見守るしかない。

このことは、ルールブックにも書かれている。「プレーヤー、レフリー、タッチジャッジ以外のものは、競技場及び競技区域内に入ってはならない」

チームワークの大切さを物語ります。ラグビーは、キャプテン（リーダー）の存在価値が他のチームスポーツとは違い、とても大きいことが特徴です。授業の主役は子どもたちです。授業の中では、子どもたちが主体になって、取り組んでほしいものです。また、授業以外においても教師に頼らず、リーダーなどを中心に、自分たちの力で取り組める集団になってほしいと思います。



その5 ラグビーは紳士のスポーツ

ラグビーは、身体の大小に応じたさまざまなポジションが「15」存在するため、どんなプレーヤーにも役割が与えられる。また、ラグビーは雨が降ろうが雪が降ろうが、一度試合をすると決めたら必ず行われる。天候やグラウンド状態は、相手チームにとっても同じこと。ラグメンは、やると決めたら最後までやりとおす紳士である。また、激しいプレーが信条だけに、ラグメンには、紳士的な精神をもち合わせることを要求される。

それぞれの個性や特性などに応じて、一人一人に役割のある集団、一人一人が活躍できる集団、一人一人に居場所のある集団をめざして本校教職員は努力しています。

ラグビーは相手に「タックル」することが許されているスポーツです。だからこそ、ルールを重視し、紳士としてふるまうことが要求されます。タックルされて、いちいち頭に来ていたら、試合が成り立ちません…。また、タックルが許されているだけに「弱い気持ち」や「恐怖心」が浮かんでしまえば、戦うことができません。以前は、そういう気持ちをみんなでふっ切ろうと、ある大学のラグビー部は、試合前のロッカールームでお互いを殴り合ってからグラウンドに出てくることもあったそうです。選手が試合会場に入場するときは、顔に血をにじませたり、涙を流したりしていることもあったとのこと。…今ではこんな習慣はないと思います。

楕円球を使うことも大きな特徴です。素直に転がらない、どちらにバウンドするかわからないなどが人生に例えられることがあります。また、ボールを前に投げてはいけないルールも人生に例えられることもあります。ボールを投げるためには、自分がまず前に進んでから味方にパスをしないと、後ろへ後ろへと下がって行ってしまいます。まず、自らが前に進む勇気が必要だと教えてくれているように感じます。



ぼくみたいな体の選手ががんばれば
これからの子どもたちにも
メッセージが伝わると思うんです。

田中 史朗（ラグビー日本代表選手）

田中選手は、身長166cm、体重75kgとラグビー選手としては、恵まれた体格ではありません。ワールドカップ前には「命がけで戦う」と奥さんに宣言したといいます。奥さんは田中選手の言葉として「もし俺が死んだら新しいいい人見つけてなって言われてます」と明かしています。奥さんに遺書を残したという話もあります。